マ「あれ〳〵御父さんが！　御父さん、御父さん！」と呼んだ。嬉しさが思ひ掛けなくて、「マギー」は泣き出した。父親の驚きは非常で、一體どうした事かと、馬を停めて訊ねる其間に、「マギー」は驢馬から滑り下りて、父の鐙に走り寄つた。ジプシーがマギーは道に迷つて自分達のテントに見えたから、送り届けに來たので、一日歩きまはつた揚句に、なか〳〵の骨折だといふので、父親は、五志をジプシーに遣つて返し、マギーを馬に乗せて家路に向つた。途中て自分に寄り縋つて泣いて居る娘に、

父「如何したのだ、エ？　如何して一人で歩きまはつて迷子になつたのだ」と訊ねた。

マ「御父さん、私逃げたの。あんまり厭だつたから兄さんが大變怒つて居るのですもの。辛抱が出來なかつたの」

父「何だ！　何だ！　御父さんの處から逃げるなんて、不可ないよ。御前が居なくなつたら、御父さんは如何すると思ふ」

マ「もう〳〵逃げないわ、必然〳〵」

その晩、父親は嚴然と、家内の者へ、思ふ處を言ひ渡したと見え、「マギー」は母からも、「トム」からも、一言半句でもジプシーの處へ逃げた事に付いて、小言も嘲弄も聞かされなかつた。「マギー」は、常ならぬ此所置に、却て恐れをなして、あんまり自分の行が惡いので、皆が呆れて口にも出さぬのだろうか、と時には思つた。（終）

（これからトムとマギトが成人していよ〳〵此小説の本領に入るのですが茲では子供としてのトムとマギーの事に止めて置きます。）

恐ろしき疫痢

醫學士　石塚保吉

疫痢といふのは、四五年前まで、東京にはあまりなかつた病氣である。四五年此のかた東京にはやつて今年などは盛に流行して居るやうである。

もとは名古屋九州の地方病であつて、一昨年の如きは非常に激烈な流行があつて、福岡縣だけでもその患者が四五千名にも及んだ事がある。

地方によつて名稱が違ふ。疫痢とは熊本の各前で之れを學術名として世界に發表したのは福岡大學の伊東教授である、急症とは福岡地方の呼び名である。名古屋では颶風病(ハヤテ)と云ふて居る東京では、疫痢ともいひ、又小兒の急性赤痢といふ人もある。とにかく非常に恐ろしい病氣で、小供の病氣の中で最恐るべきものである。大多數を發病以後二十時間位の間に死亡する。

○食べ過きが基

病氣の原因は、多くの場合暴食である。年齢は幼稚園時代から小學校の始めに最も多い。卽ち二三歳位から七八歳位までに最多いそれも非常に丈夫な生れてから醫者にかゝつた事のないといふやうな、肥え太つた小供に多い。かういふ小供は、家庭でも油斷して、無制限に食物を與へたりするからである。小供の方はわきまへがなし、母親の方でもつひゆるして、さま〴〵のものを喰べさせるからである。最近の例で見ても水密桃を一度に三つたべたとか、ばなゝを澤山たべたとか、さくらんぼを二つかみ一度にたべたとか、或は五もくずしをたべ過ぎたとかいふのが原因になる。洗腸をして見ると此等のものが消化せずに出て來る。最初の兆候は、突然の熱發である。夕方まで活潑に遊んで歸宅すると、急にねむさうになつたり、元氣がなくなつてたふれる。さわつて見ると熱がある。はかつて見ると四十度といふやうな有樣である。尙はげしい場合には、全身の疫攣が伴ふ、脈は弱いかまたは不同になる。熱がひどいので大抵はおどろくが中には、一向無頓着で、寢冷え位と思ふて平氣で居る人もある。又左程でなくとも

明朝まで待たうと云ふ人もある。前申す通り一時を爭ふ急病であるからさういふのは到底助かる見込はない。

どうして急にそんな病氣になるかといふに、普通、大腸の中に生息する大腸菌といふ黴菌が、食過が元となつて、急に腸の中で繁殖して有毒のものとなつて、盛に毒素を吐きだすからである。そして多毒が食物と共に腸で吸收せられて、腦の方へまわつて腦膜炎と同じ樣の兆候をあらはすのである。

應急の手あてとしては、灌腸器があれば灌腸をするがよい。次に下劑を用ゐる事が最肝要である下劑の中でヒマシ油が一番よい、普通藥であるから少し位のみ過ぎても害にはならない、小供には最よい。十瓦か十五瓦位飲ませると通じがつく、通じがつくとよほど快くなるのである。

此の病氣の勢は、非常な激烈なもので、助かるか助からないかは、醫者に見せる事の早いか遲いかによつて定まる位のものであるから急に元氣がわるくなつて熱が出て來たなといふ場合には、直に醫者に見せるがよい。夜中で、醫者を起すのは氣の毒だなどゝ遠慮をすると、手おくれがして助からない。夜中でもなんでも可く手あてをする方は助かるものである。

此の病氣に對しての醫者の手あては（新らしい病氣であるから、醫者の中にでもよく知つて居る人もあるし知らない人もあるが）やはり下劑と洗腸の二つである。上の方から下劑をかけて毒物を拂はする、下の方から食鹽水を用ゐて腸を洗滌するのである。一時間でもこれを多くすればするほど病氣は快方に向ふ。往々此の療法を危ふむ人もあるが、殆ど下劑と洗腸で勝負はついてしまふのである。洗腸といつても五百瓦や千瓦の水ではだめである、それ位の量では、單に直腸大腸を洗滌する位のものに過ぎない。此病氣は小腸の中にあるのであるから、五千、六千乃至八千瓦位の多量

の水を用ゐて思ひきつた洗腸をしなくては效果がない。そして、一回だけではいけない、後から〳〵と何回もつゞけてやらなくてはだめである。黴菌が猛烈に繁殖するから、決して一度で安心といふ事は出來ない。下劑も後から〳〵と二日位はづゞけてのまなくてはいけない。三時間おき位に殆ど徹夜の覺悟で洗はなくてはならぬ。つまり黴菌の繁殖と競爭するのである。洗腸の方が勝利を得れば快復するし、敗北すれば死亡といふ事になるのである。

さて、洗腸と下劑が首尾よく其効を奏して快方に向ふとしても、其後が大切である。全快までには一月位を要する。下痢、血便がつゞく、しばらくの間熱がある、此時期の養生が肝要である。此間の養生が不十分であると必ず再發する。通常飢餓療法をやるのである。最初二日位は番茶のさましたのを飲ませ次におもゆを用ゐる。便の模樣によつて、おもゆの中に脱脂乳を五瓦か十瓦程入れて與へ、其次には二十瓦といふ風に漸次にすゝめてゆくのである。

飢餓療法といふのはなか〳〵容易の事ではない今日まであまり行はれて居ないのと、小供にきゝわけのないのとで更に困難を加へるのである。しかしこれが唯一の療法であるから之れを嚴守しなければ快復の見込みはたゝないのである。豫後の養生に失敗した例は非常に多い。最初甚だ調子よく快方にむかふたのでつひ養生を怠つていけなくなるといふやうな事になるのである。

この病氣を傳染病とする說と、傳染病でないとする說とあるが、法律では傳染病として取扱つて居る。議論を別として大事を取つて所置した方がまちがひがないのであるから、子供はなるべく隔離して近づけぬやうにするがよい、又大便及び大便に汚れたるものを凡て消毒藥を用ゐて消毒した方が安全である。